雑誌評：『新社会学研究』

松浦智恵美
立命館大学大学院　先端総合学術研究科，看護師
chiemi.cat@nifty.com

Journal review: Japan Sociologist

Chiemi MATSUURA
Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences, Ritsumeikan University

1　はじめに

本稿は，『現象と秩序』誌で初めての「雑誌評」である．対象としては，筆者が2017年12月1日に開催された「合評会」でコメンテーターをつとめた『新社会学研究』[1)] を取り上げた．

『新社会学研究』は，新曜社から発行されている社会学一般誌であり，現在日本で発行されている社会学雑誌のほとんどが，学会の機関誌であるなかで，異彩を放っている．

同誌は，現在まで第1号と第2号が出ているが，本稿では，そのうち，とくに第1号に焦点を当てて，部分的に2号にも触れつつ論じていくことにしよう．

2　本誌の特徴の分析 - 学的思考の可能性追求

まずは，本誌の編集の方針を，誌面の構成から読み取ることにしよう．1号と2号は類似の構成となっており，「特集」－「連載」－「公募特集」－「連載」となっている．ここで本誌1号の構成を示すと以下の通りである．

巻頭エッセイ――社会学と芸術
「特集」　〈いのち〉の社会学
　特集〈いのち〉の社会学によせて
　〈尊厳ある生〉のなかでの看取りとは？――極私的社会学・序
　〈生〉と〈身〉をゆだね，あずけること
　――「認知症」とされる人と私の〈かわし合い〉のフィールドワークから
　いのちとおうち――野宿者支援・運動の現場への手紙
　死に支えられた幸福の国と「曖昧な死」への意味づけ
　――ブータンから東日本大震災への応答

「連載」

くまじろーのシネマ社会学①

「ふりかえるべき」戦争と「かつてあった」戦争

音楽する映画①

『アーティスト』――映画と音楽の蜜月はトーキー映画によって始まったのか

論文投稿と査読のホントのところ①

加点法と減点法の齟齬問題の周辺

ネコタロウに聞け！社会学者スーパースター列伝①　ラザースフェルド

「公募特集」　生きづらさとはいったい何なのか

公募特集によせて

「性的冒険主義」を生きる

――若年ゲイ男性のライフストーリーにみる男らしさ規範と性

「カツラ」から「ウィッグ」へ

――パッシングの意味転換によって解消される「生きづらさ」

子づれシングル女性の生きづらさ

――奈良市ひとり親家庭等実態調査より

「連載」

ビデオで調査をする方法①

ビデオで調査することのメリットとデメリット

――「リアリティ喚起力の大きさ」と「常識に汚染されるリスク」

ファッション＆パッション①『non-no』から始めよう

同人書評

ネコタロウに聞け！外伝篇①ディストピア

また 2 号は以下の通りである.

巻頭エッセイ　太鼓師のソシオグラフィ

「特集」　映画を読み解く社会学

特集　映画を読み解く社会学によせて

ポストヒューマン時代の恋愛のゆくえ

――スパイク・ジョーンズ監督『her』が問いかけるもの

映画『下妻物語』に描かれる女同士の友情

――親密性をめぐる誤読の快楽と政治

核の「重さ」と「軽さ」

――一九七〇年代論の手がかりとして『太陽を盗んだ男』を読み解く

被災地はどこへ消えたのか？
——「ポスト震災二〇年」における震災映画の想像力
別離にもかかわらず生きる力を与えてくれた愛について
——映画『冬の小鳥』を読み解く
『ひろしま』から溢れだす力を見直す——原爆映画の社会学に向けて
「連載」
くまじろーのシネマ社会学②　太平洋の鷲・嵐・翼，そしてキスカ
音楽する映画②『ピアノ・レッスン』——音楽とは何かを考えるレッスン
極私的社会学①　グループホームで父を看取る(1)
——〈医療行為をしない人の死〉はどのように訪れるのか？
論文投稿と査読のホントのところ②
「海図なき海での航海」としての査読誌への投稿
ネコタロウに聞け！——社会学者スーパースター列伝②　マルクーゼ
「公募特集」　生活者の社会学
公募特集によせて
偶有性をはらむコミュニケーション
——サバイバルゲーム実践にあらわれる「生きがい」の析出
台湾人「哈日族」の生活構築にみる〈日本〉をめぐるファンタジー
——哈日族のグッズコレクションに着目して
廃墟と描線
——区画整理陳情書にみる，一九四〇～五〇年代広島の戦災復興と「生活者」の語り
フェミニズムを生活者の手に取り戻すために
——「性の商品化」に対する現代女性の「気分」の分析を通して
「連載」
ネコタロウに聞け！社会学スーパースター列伝③　ライト・ミルズ
ビデオで調査をする方法②
ビデオの説明力過剰性を克服する仕組みとしての「異物化」
ファッション＆パッション②
ファッション誌の乗換とファッション系統の醸成時期
同人書評
ネコタロウに聞け　異書・外伝篇②　社会学者

まず，1号は，「特集　〈いのち〉の社会学」と「公募特集　生きづらさとはいったい何なのか」であり，2号は「特集　映画を読み解く社会学」と「公募特集　生活

者の社会学」である．ここにはおもしろい仕掛けがあり，1 号の「特集」の「〈尊厳ある生〉のなかでの看取りとは？――極私的社会学・序」が第 2 号の「連載」に続いていた．つまり，2 号の連載の枠組みの一つである「極私的社会学①」は，実は 1 号の「特集」にある「〈尊厳ある生〉のなかでの看取りとは？」論文の副題とリンクしたものになっている．すなわち，副題には「極私的社会学・序」と書かれていたのである．この副題の「・序」の部分が 2 号になって「①」となり，連載の初回になっているのである．こういった仕掛けがあると次も買いたくなる．

そして，「連載」のなかでも目を引くのが作者匿名の「論文投稿と査読のホントのところ」ではないだろうか．査読ア太郎という匿名を使うことについて不思議な感覚を持つが，読んでみると査読者が投稿者とともに良い論文づくりに伴走しようとしているのが良く分かる．その「研究支援プロセス」の節において，筆者は，投稿者と査読者の間の減点法と加点法の齟齬問題が重要だとして，「掲載原理が，『減点法』なのか，『加点法』なのか，によるトラブルは，査読において，頻発しているように見える．」（査読 2016：83）と述べている．具体的には，「一般的に，雑誌の投稿と査読においては，投稿者は減点法的理解に傾きやすい性向があると思われる」からであると．投稿者にはそのような傾向がある一方で，査読者には違った性向があるという．すなわち，「査読者が最初に行う作業が，投稿論文を通読した上での総合評価であるとするのなら・・（中略）・・究極のところ，加点法的に，論文のオリジナリティや，論文内在的な意義の大きさについての判断」（査読 2016：84）を行っているだろう，というのである．つまり，投稿者は，「減点法」志向であるのに対し，査読者は加点法志向なのである．ここに食い違いがあるのである．これは，ひとつの卓見であるように思われた．なるほど，そういう齟齬が構造的にあり得るのか，と感心した．

また，「査読者が投稿者から刺激を受けた結果として出してしまう成果の方が，元の査読論文が公表されるよりも前になってしまうような微妙な問題が，生じる」（査読 2016：85）という重要な指摘もこの論文にはある．この点については，通常は，査読者の行為が倫理的に適切か否か，という倫理問題が語られる展開になりそうな問題であるのにもかかわらず，本論文では，読者のそのような期待（？）を裏切って，さらなる社会学的分析が語られていっている．そして，実践的に（倫理）問題は解決されている，という評価もできるようなシステムが語られているのである．では，それはどのような理路によってなのだろうか．

じつは，査読者の成果が先行して公になってしまうことに関して，発想の元になった投稿者の論文の掲載を邪魔立てして，学問的アイディアの占有や第一想起者の権利を獲得しようとしたと思われたくない，と多くの査読者は考えているだろうという指摘がなされているのである．つまり，「痛くない腹を探られたくはない」（査読 2016：86）と多くの査読者は考えているので，（必要以上に）投稿者に対して「親切」にコ

メントを書くという（少々おせっかいな）“相互助け合い関係”の提案が実質的にはなされているのではないか，という指摘がなされているのである．

ここまで書かれてしまうと，すこし，うがち過ぎの意見ではないか，とも思われるが，少なくともこれは，従来の議論にない，突っ込んだ思考であるとは言えるだろう．

査読者が，（盗用ではない形で）査読という経験から知的な利益を得ている可能性がある，という問題は，学問を産業として考えた場合には，（盗用ではないにしても）知の倫理問題を惹起してしまうため，これまで，ほとんど語られてこなかった．

さらに，査読者というものが，自分の利益を最大化する，という原理とは違う原理で行動している可能性（倫理問題の文化的解決という可能性）に関しての議論も，ほとんどなされてこなかった．たとえば上述のように，投稿論文から得た刺激をきっかけとしてオリジナルに発想した知的成果に基づいて，自らのオリジナルな研究論文を執筆した査読者というものが，その「自らが得た利益」にみあった利益を投稿者に与えようと努力する傾向がある，という指摘は，発想の原理が「ホモ・エコノミクス」的でないため，これまで語られてこなかったように思われる．

これまで，多く語られてきたのは，「真っ黒な盗用」や「グレーゾーンの盗用」に関することがらであって，そこでは，「ホモ・エコノミクス」的な人間理解から，非倫理的な査読者が，執筆論文の価値を高めるために，戦略として，投稿論文の掲載が遅れる（あるいは不掲載になる）ように振る舞う可能性がある，ことが問題として語られてきたように思う．それは端的に「利益相反問題」が査読に関してある，という形で扱われ，この「利益相反問題」に対処するために，編集委員会が，査読プロセスに関する記録を保存する必要が語られたり，投稿者からのクレームを処理するシステムの構築の必要性が語られてきたりした．けれども，本当にそのような議論の立て方しかないのかどうか，という点については，あまり語られてこなかったのではないだろうか．

たしかに，査読ア太郎のように語ることは学会誌においては困難なことである．それは，学会誌の不文律を犯す指摘でもあるからだ．なぜなら，上述の「利益相反問題」には，広大なグレーゾーンが存在し，グレーゾーンの事象を適正に処理するメカニズムは，開発されていないからである．結果として，この手の問題にはたてまえ的な触れ方以上の触れ方はしない，という（暗黙の）合意が，学会誌の査読の世界にはあるのではないだろうか．

上述のように考えると，査読ア太郎のこの論文は，「タブー破り」をしている論文であることになる．これまで，他の論者が言わないようにしてきたことを言うことには，いろいろ摩擦や抵抗もあると思われる．おそらくはそのような事情から，この論文が「匿名」で書かれているのではないだろうか．しかし，この論文が明らかにして

いる日本の投稿―査読システムの潜在的問題としての「利益相反問題」は，ほんとうにそのような問題構成が適切なのか，という観点も含めて，知的に議論するべき問題である．もし，査読ア太郎が言っているとおりならば，その「利益相反問題」は，査読者の自主規制によって，すなわち，査読者の知的達成が投稿者に無償で返されることによって，ほぼ文化的に解決されている問題なのである．たしかに，投稿者のなかには，その「無償提供」を活かすことができるものも，できないものもいるだろう．その点だけに注目するなら，「無償提供」を活用できず，結果的に「掲載不可」となった投稿者は，たしかに「知的成果の個別帰属と対価の原理」で考えれば，不満をもつことになるかもしれない．しかし，知的世界においては，「知的成果の共有と互酬性の原理」(A) と「知的成果の個別帰属と対価の原理」(B) を比較すれば，(A) 原理の方が，基盤的なのではないだろうか．「投稿―査読システム」のたてまえが，(B) 原理的に設計されているものだとしても，その実際的運用が (A) 原理的になされていることが，もし，査読ア太郎の連載で発見されているとするのなら，その価値は大きいということができるのではないだろうか．

そのように考えると，本誌が商業誌であって，かつ，匿名投稿も同人の合意で可能となるような同人誌でもあるということが，この連載の，研究者の清廉さへの信頼が失われかねない，ぎりぎりのところを論じて成し遂げている知的達成を支えているということができるだろう．このような読み取りがどこまで適切かどうかはわからないが，査読ア太郎という匿名者による連載が，商業誌であってかつ，同人誌であるという本誌の可能性と結びついたものであるだろうというところまでは，言えるように思われた．

本誌の美質は，上述のように個別の論文/連載が，学的思考の可能性をぎりぎりまで探求した知的なものであるというところにあるだけでなく，全体的な編集部分にもある．以下では，少々走り書きになるが，本誌の魅力を支える編集的工夫のあれこれについて述べて行きたい．

本誌には，「特集」が 2 種類のっている．いずれも，現代社会における重要問題をあつかっており，興味深いが，どちらかというと，前半の，公募でない「特集」の方が，後半の公募「特集」よりも，やわらかい書き方の原稿を集めたものになっている．前半の「特集」は，中堅以上の社会学者に「やわらかい」ものを書かせて新境地を開かせようとしたのだろうか．ここらあたりには，どうしても官僚制的になってしまう『社会学評論』編集委員会とは異なる，魅力開拓者的に自由に提案し振る舞うことを志向した，本誌同人たちの狙いが見て取れるように思われた．1 号，2 号ともに．この 2 つの特集の間に同人たちが書いた連載がちりばめられており，学会機関誌にはない，芳醇で贅沢な構成になっている．商業誌に近いテーストと言ってもよいかもしれない．

前から順に読み始めるとすれば，食事をするときに似ている．つまり，主菜である「特集」と「公募特集」の間に箸休めの「連載」があると見るとおもしろいと思った．例えば『社会学評論』と比べてみてもこの 2 種の「連載」の置かれている場所が特徴的である．『社会学評論』では「投稿論文」－「書評」，「特集」－「書評」という並びになっている．そして，雑誌のページのほとんどを論文に費やしているため，勉強にはなるが堅い印象がある．本誌については，社会学になじみの薄い読者への楽しみ方アドバイスとして，短編である前半の（公募でない）「連載」から読み始めて，社会学者の人間性に近づいてみることをお勧めしたい．

3　挑戦的に問題提起する「特集」

1 号の特集は〈いのち〉について，である．＜特集＞掲載の各論文は，フィールドや切り口は違うものの，それぞれから，大きな問題提起を読み取ることができる．

三浦論文は，尊厳ある死とはどのようなことを示しているのか，今の社会において「患者の意思決定のあり方へと問題をすりかえてしまっているといわざるをえない.」（三浦 2016：17）と近年の出生前診断や尊厳死法案についても成立する重要な指摘をしている．

出口論文は，認知症に焦点を絞り，認知症の初期段階でつらい思いをしている状況を一人称で表現し，認知症の人から見える風景を描いている．認知症の人を「〈いま，ここ〉を生きていないと決めつけてしまっていいのだろうか.」（出口 2016：35）と著者が語りかけてくる．

山北論文は，「いのちとおうち」（山北 2016：45）を論じている．この論文は手紙という形式をとっており，表現が「お久しぶりです．どないでっか．なんで関西弁なん？今日は手紙を出してみたいんよ」（山北 2016：45）と，はじめから口語調である．評者はこの形式の斬新さに素直に驚いた．けれども，別の本で似た驚きを得たことがあることを思い出した．それは，飯場で自ら働きながら，そこでの暮らしと仕事を記録した本である『飯場へ』（渡辺 2017）であるが，この本で渡辺は，手書きメモの文字をそのまま本文に矢印を書き入れる形で挿入していた．たとえば，先輩職人から理不尽に怒られたときの様子を書いた文章から矢印を引き出して「はぁ・・，何だよそれ．今日現場で嫌なことでもあったのか？」と手書きメモのままページの余白部分に挿入していた（渡辺 2017:105）．手紙形式の山北の表現も手書きメモ挿入のこの渡辺の表現も，通常の論文とは違っている．しかし，読者にどのような臨場感を与えるか，の観点から考え抜かれた表現方法であるとはいえるだろう．そういう「表現方法のイノベーション」を図るフィールドとして本誌があることは好ましいことであるようにおもわれた．また，山北論文は，野宿者支援に関する論文であるが，公園の野

宿者たちに対する「追い出し」について批判的見解を述べ，いろいろな人が集うことを「野宿者支援・運動が形や場所をかえてでも引き継いでいくべきひとつの可能性をもってたって，個人的には今でも思ってるよ」（山北 2016：52）と主張している．個人的感想をおもてに出して嫌みがないのは，形式のイノベーションが伴っているからだろう．論文を掲載する枠組みに自由がある，ということは，このようにその自由を幅広く使って効果的に書ける可能性を生み出すことなのだ，と感動を覚えた．

さいごに金菱論文について．金菱は，〈いのち〉について，日本的常識を前提としない．替わりに，ブータンの幸せの在り方を丁寧に述べるのである．「この国では，意外に聞こえるかもしれないが，死によって生が規定されている」（金菱 2016：64）と，日本での常識を相対化するのである．そして，ブータン的常識をもとに，生まれる前と死後がつながっていると考えると，我々が〈今ある〉ということはどのような意味になるのか，という方向へ，我々の思考を促すのである．そういう議論の果てに，金菱は，東日本大震災に関わる死のあり方をブータンのそれに重なるものとして得る地点に達する．この論文がベースにしている議論の流れの離散性は，通常の学術論文がベースにしている議論の流れの離散性よりも，大きい．けれども，そのように話を大胆にすすめることによってしか，たどり着かない議論の行き先，というものがあるのではないだろうか．

この『新社会学研究』第 1 号の，公募ではない＜特集＞に掲載された各論文は，いずれも，与えられた形式の自由さを存分に活かした成果を生み出していて，挑戦的（チャレンジング）な諸論文になっているように思われた．雑誌に対しての評価の形にまとめるならば，このようなチャレンジを中堅社会学者に促している点に，本誌の重要な価値があるといえるだろう．

なお，『新社会学研究』第 2 号の方の「特集」の〈映画を読み解く〉では，映画というフィクションがリアルに描かれている．阿部論文「ポストヒューマン時代の恋愛のゆくえ」では，AI と人間の心の通い合い(交流)を通して人工知能を持った AI である『her』や他の OS たちが，急速に進化を遂げ新たな世界へ旅立とうとする姿と，それを他者化して自らは人らしさに安住しようとする人間の不安と期待を描いていると著者は言う．また，映画『下妻物語』は，田舎のあぜ道をロリータファッションで過ごし，他者を受け入れない少女とヤンキーとの不思議な友情が芽生える物語であるが，3 本目の杉浦論文で著者は，そこから女同士の友情は果たしてあり得るのかという問題提起を引き出している．4 本目の山本論文が扱っている映画は，核爆弾を自分ひとりで作り政府を脅すという突飛な発想とも思える映画であるが，そこから核の恐怖に対する人間の浅はかさを，作者は訴えているという．5 本目の論文が扱っている『男はつらいよ』に関して稲津は，阪神淡路大震災時の被災地と被災者へのまなざしについての資料として解析している．これらのどの論文からも，映画というフィクシ

ョンでありながら，現実以上にリアルな映像作品を，社会学的に，つまりは，いかにも現実に起こりそうなことの表出として，扱っている．しかし，広島原爆投下時を扱った映画や，1970 年代の韓国における国際養子縁組みというドキュメンタリーを基にした映画を通して，それぞれをあつかった論文の著者達が，想像力や表現力の限界とそれゆえに溢れ出す力に言及していることからあきらかなように「リアルなもの以上にリアルなフィクション」のなぞを解き明かす仕事は，映画の単独の仕事であるというよりは，映画の社会学の仕事である，といえるかも知れないように思われた．

『新社会学研究』1 号と 2 号の 2 冊の（公募でない）＜特集＞を読み比べてみると，リアルとフィクションをどう組み合わせ的に捉えるのか，社会学が取り組む際に示す多様さに驚きを覚えた．フィクションである映画がリアルに結びついたものとして描かれ（2 号），現実を最もリアルに書こうとすると，フィクショナルな表現に行き着くのだ，ということが実例を持って示されている（1 号）．このリアルとフィクションの相互浸透のなかに，この世を表象するということの真実，この世を分析するということの困難，があるように思われた．社会学者は単なる，現実に対しての説明者ではないのだ．現実を解明する際にフィクションを創作するということは，そのように現実を変える介入者でもある，ということである．社会学者は現実を説明しつつ介入し（1 号），現実に介入している者達の介入の仕方を説明するとともに介入のなされ方の社会的定位をしている（2 号）のである．ただただ論文を書く，ということが，どうじに一種の社会変革でもある，ということが丁寧に示された諸論考がここに集まっている．熟読玩味するべき諸論考である，というべきではないだろうか．

そのように考えてみると，じつは，この 1 号と 2 号の＜特集＞で示されていた「社会学像」は，すでに「創刊の言葉」で示されていたようにも思われる．

この「創刊の言葉」は，難解で，にわかには読み解き難いが，本誌 1 号 2 号を読み終えた後に再度読み直すと，社会学の可能性を高らかにうたっているようにも思われるのである．本文のいくつかの論文を読んだあとで，この「創刊の言葉」を再読なさることを読者にはお勧めしておきたい．

4　「公募特集」についてのコメント．その原動力とは？

この章では，「公募特集」を考えていきたい．

本誌 1 号の「生きづらさ」公募特集では，人びとの苦しみを，生きづらさと優しく表現している．また，本誌 2 号の「生活者」公募特集では，社会のさまざまな場面で「生活者」であることを，比較的若手であると思われる社会学者たちが精密に分析している．どれも聞き取りや実態調査という研究手法を用いた作品であって，読み応えがある．

第 1 号「公募特集」の第 1 論文である大島論文では，「若年ゲイ男性のライフストー

リー」が扱われており，このような本音を引き出すまでには相当の時間と関係性づくりが必要だっただろう，と思われた．そして，その大量の時間と関係性づくりにつぎ込まれた労力を支える意思の力は，いかにして保ち続けられたのだろうか，と興味がひかれた．

また，第 2 論文である吉村論文では，「重度の円形脱毛症によってまだら頭やスキンヘッドになった女性たちのうち，『かつらを着用すれば何も問題がない』と語る事例を通して，彼女たちがパッシングによって生じる問題にどのように対処しているのかを明らかにする」（吉村 2016: 119）事を目的としている．そして，彼女たちがパッシング（カツラをつけてやり過ごすこと）によって生じる問題を「生きづらさ」と表現しなくなる展開が，「病気」から「おしゃれ」への展開として分析可能であること，すなわち，「病気」だからという理由で「カツラ」をつけているのならば，その隠蔽が必要になるし，露呈は「生きづらさ」となるが，そうではなくて，「おしゃれや身だしなみ」として，「ウィッグ」をつけているのならば，それは隠蔽が不要で，したがって，露呈も「生きづらさ」とはならない，という論理転換があることを明らかにしている．つまりは意味の転換によって生きづらさを解消させ得ていることを，聞き取りによって明らかにしている．ここでなされているのは，心理学的分析ではない．「生き方にかかわる説明の様式」つまり「生きる様式」の取捨選択の実際に関する社会学的分析である．つまりは「生活者」の「生活様式研究」がなされているのである．重要な研究であるようにおもわれた．この論文に関しても聞き取りをするまでの綿密な準備や人権を尊重した丁寧でかつ粘り強いアプローチを支える意欲がどのようにして維持されたのか，興味深くおもわれた．

評者は，本誌の公募特集の諸論文から，基本的には，社会学のかかわる事象の「範囲の広さ」や，その検討の「深度の深さ」を学んだが，それと同時に，いったいなぜそのような面倒な探求をする意欲を維持しうるのか，という疑問も持った．最後にこの点について，わずかに論じておきたい．

その意欲は，もしかしたら，社会学の成果の「当事者のあり方をそのまま評価する性質」からくるものなのかもしれない，と最近はおもっている．

たとえば，本誌の 1 号，2 号の「公募特集」のどの論文にもいえることだが，社会学者が書くと，人々の「生きる強さ」がありありと目の前に現れでてくる．当事者たちは生きづらさの中で，その生きづらさとは別の，関係のない手段や考え方を持って楽しく生きようとしているのではなく，かといって，真っ正面から，問題を乗り越えているわけでもない．人々がおこなっているのは，苦しみの中で生まれた「やり過ごし方」を大事にして生きている，という中間的な生き方だ．そうした“生きづらさの乗り越え方のリアリティ”は，読者にも（生きる）力を与える実践的で，貴重なものだ．言い方をかえれば，“生きづらさ”を等身大の工夫で乗り越えるやり方を呈示する「有

効性感覚」が，社会学の仕事にはあるといえるのかもしれない．そこに至ったらすごいという実感があるからこそ，社会学者たちはそれぞれのテーマを深く掘り下げる意欲を持続し得ているのではないだろうか．そして，その社会学者の姿勢に，つまりは，無茶を要求するのでもなく，あきらめを促すのでもない，まっとうな姿勢に，信頼を寄せられると思うから当事者たちは本音を話してくれるのかもしれない．そういうところから生まれてくる人間関係のリアルさが社会学者の活動の原動力となっているのではないだろうか．本誌の「公募特集」の各論文を読んで，そのような感想をもった．少しでもあたっているところがあれば，幸いである．

5　非社会学プロパー読者としての感想 [2)]

ここまで，本誌について，非社会学プロパー読者としての感想を書いてきた．社会学一般誌の雑誌評としてかんがえるのならば，社会学者が担当するのが，普通だろう．しかし，評者には，評者だから書くことができた内容もあるのではないか，という自負がある．傍目八目，という価値が，あるように思われるのである．社会学者自身は，社会学者の活動の特異性に注目することが困難である．しかし，前章で述べたように，その学的達成の水準だけでなく，その達成にいたる社会学的探求の粘り強さについても，非プロパーの眼から見れば，驚くような質が存在している．こういう観点からの「社会学の意味の確認」をも可能とするところにも，『新社会学研究』誌が，誰もが手に取ることができる商業誌でかつ，実験的な取り組みが容易にできる同人誌である，ということの意義があるといえるのではないだろうか．[3)]

［注］

1)　『新社会学研究』は，2016 年秋に創刊号が発行された社会学一般に関する研究誌である．好井裕明，三浦耕吉郎，小川博司，樫田美雄，栗田宣義（順不同）の 5 人の同人によって編集されている．この雑誌は，同人誌であると同時に，新曜社が発行している商業誌でもある．

2)　評者の職業は看護師であるが，徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻で博士前期課程を修了した後，立命館大学大学院先端総合学術研究科の博士後期課程に編入し現在在学中である．社会学やエスノメソドロジーを学び，医療現場における新人看護師の熟達や学びの実態について研究している．

3)　本稿を作成するにあたって，『新社会学研究』誌および『現象と秩序』誌の編集同人たちとの対話がたいへんに有用であった．記して感謝する．

【文献】

阿部潔,2017,「ポストヒューマン時代の恋愛のゆくえ―スパイク・ジョーンズ監督『her』が問いかけるもの」,『新社会学研究』2:15-24.

出口泰靖,2016,「〈生〉と〈身〉をゆだね，あずけること――「認知症」とされる人と私の〈かわし合い〉のフィールドワークから」,『新社会学研究』1:30-44.

稲津秀樹,2017,「被災地はどこへ消えたのか？―「ポスト震災二〇年」における震災映画の想像力」,『新社会学研究』2:46-56.

金菱清,2016,「死に支えられた幸福の国と『曖昧な死』への意味づけ――ブータンから東日本大震災への応答」,『新社会学研究』1:61-73.

松井理恵,2017「別離にもかかわらず生きる力を与えてくれた愛について―映画『冬の小鳥』を読み解く」,『新社会学研究』2:57-66.

三浦耕吉郎,2016,「〈尊厳ある生〉のなかでの看取りとは？――極私的社会学・序」,『新社会学研究』1:15-29.

大島岳,2016,「『性的冒険主義』を生きる――若年ゲイ男性のライフストーリーにみる男らしさ規範と性」,『新社会学研究』1:93-118.

査読ア太郎,2016，論文投稿と査読のホントのところ①「加点法と減点法の齟齬問題の周辺」,『新社会学研究』1:80-89.

杉浦郁子,2017「映画『下妻物語』に描かれる女同士の友情―親密性をめぐる誤読の快楽と政治」,『新社会学研究』2:25-35.

渡辺拓也，2017,『飯場へ―暮らしと仕事を記録する』,洛北出版.

山北輝裕，2016,「いのちとおうち―野宿者支援・運動の現場への手紙」,『新社会学研究』1:45-60.

山本昭宏,2017,「核の「重さ」と「軽さ」―一九七〇年代論の手がかりとして『太陽を盗んだ男』を読み解く」,『新社会学研究』,2:36-45.

好井裕明,2017,「『ひろしま』から溢れだす力を見直す―原爆映画の社会学に向けて」,『新社会学研究』2:67-75.

吉村さやか,2016,「『カツラ』から『ウィッグ』へ――パッシングの意味転換によって解消される『生きづらさ』」,『新社会学研究』1:119-136.

＊＊

【編集後記】

『現象と秩序』第 8 号をお届けします．巻頭の特集「社会学を基盤にした（ソーシャルワーク系）新専門職の可能性」は，第 4 号掲載の小特集「専門職教育における社会学」の発展企画であり，いずれも，社会学とは何か，という探究の成果であるといえるでしょう．江原論文は，社会変革に志向したソーシャルワークと社会学が協働できる可能性を示唆してくれています．巽論文はその路線が「大学職員の研究者化」のなかで可能となる道筋を示し，木下論文は，社会学系の各学会が若手研究者問題を真剣に考えることが，社会学変革と社会変革の同時達成に道を開くのだ，と主張しているとも読めます．実践的には，いずれもそのとおり，という気がしますが，もうひとレベル，メタの視点に立とうとするときには，内田隆三の見立てが参考になるでしょう．内田は，「社会学は何かある対象について研究しながら，同時にそういう研究をする自分自身の正当性を問題にし，自己言及をはじめる・・(中略)・・・それは社会学が自分で自分を根拠づけようとして，結局，自分を宙吊りにしていく過程」である（『社会学を学ぶ』25 頁）と 2005 年に書きました．根拠付けようとすることが，どうじに，根拠付けの困難を確認する作業にもなる，という見立てを述べてくれていたわけです．それが分かっていて，なおも，社会学の根拠付けを志向しつづけるべきか，が 21 世紀の今，問われているようにも思われます．社会に対して実践的であろうとすればするほど，実践的に関わることが困難であるような存在としての社会というものが見えてきてしまうのが，社会学と社会の関係なのかもしれません．なるべく冷静に，複眼的に考えていきたいと思っています．

付記：本号の特集の関連企画として，第 16 回日本福祉社会学会大会(2018 年 6 月 16 日～17 日,中京大学）内で，テーマセッション「福祉専門職と社会学」が開催されます．また，松浦智恵美氏の雑誌評論文に関連して，「『新社会学研究』合評会 in 東京」が 6 月 9 日に武蔵大学構内（1 号館 B 1 階 1001 教室＝予定＝）で開催されます．　(Y.K.)

＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2017 年度）
編集委員：樫田美雄(神戸市看護大学)，　中塚朋子（就実大学），　堀田裕子（愛知学泉大学）
編集幹事：平田菜津子（神戸市外国語大学）
編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第 8 号　　2018 年　3 月 31 日発行

発行所　〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4
神戸市看護大学　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室
電話・FAX）078-794-8074（樫田研），e-mail:　kashida.yoshio@nifty.ne.jp
PRINT ISSN　：2188-9848
ONLINE ISSN　：2188-9856
http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html